

NAC 治療効果が超音波所見で判定困難だった IDC in FA

◎谷山 尚子¹⁾、持富 ゆかり¹⁾、高木 理恵¹⁾、前田 ゆかり¹⁾
相良病院¹⁾

【はじめに】線維腺腫(以下 FA)は乳腺の良性腫瘍で最も頻度が高く、超音波(以下 US)では境界明瞭平滑な腫瘍で、浸潤癌の併存は稀である。また、近年乳癌の術前化学療法(以下 NAC)は標準療法の一つとなっており、その治療効果判定の評価は CT や MRI が US 検査と比較して正確であるとされているが、利便性という点において現在でも US 検査は汎用されている。しかし US 検査での NAC 治療効果判定の評価基準は未だ明確に定められておらず、当院では腫瘍の形状、最大径、D/W比、境界部、内部エコー、後方エコー、随伴所見等を評価している。今回、NAC 治療効果が US 所見で判定困難だった Invasive ductal carcinoma in fibroadenoma(以下 IDC in FA)を報告する。

【症例】44 歳女性。他院で右乳房腫瘍を指摘され当院受診。腫瘍は術前の針生検で IDC in FA、リンパ節(以下 LN)は穿刺吸引細胞診で悪性であった為、NAC が施行された。NAC 後、右乳房部分切除術及び腋窩 LN 廓清施行。最終病理診断は IDC in FA、LN 転移。治療効果判定 Grade1b。

【考察】初診時 US 検査で右 CD 区域に 39×38×26mm の

分葉形の低エコー腫瘍。境界明瞭平滑一部粗ざうで、内部エコーは不均質で多数の点状高エコーを伴い、血流豊富。後方エコー増強。カテゴリー 4 とし、推定組織型は IDC、粘液癌で、鑑別疾患は葉状腫瘍を挙げた。右腋窩 LN は皮質肥厚し転移疑い。NAC 中・後は腫瘍の超音波所見は著変なかったが、LN は縮小傾向だった。摘出された病変は最大径 35mm の灰白色調充実性腫瘍で、組織学的には分葉形の境界明瞭な FA であり、FA が US 像での形状、境界に反映されていたと考えた。内部は FA の部分と異型細胞の増生からなる部分が混在し、これらが US 像での不均質な内部エコーや増強した後方エコーに反映されていたと考えた。

【結語】NAC 治療効果が US 所見で判定困難だった IDC in FA を報告した。今回の症例は FA に癌が混在している病変で、NAC 後の形状、最大径、境界部等は FA を反映し著変なく、治療効果が判定困難だった。このような症例では LN の評価も慎重に行うことが重要であり、更に NAC 治療効果判定を US 検査で評価する際にはその病理像を理解して臨むことが必要であると考えた。 099-224-0489